

451 乳癌の骨転移について

—骨シンチグラフィの有用性—

千賀 脩, 花村 直, 寺井直樹, 小池綏男, 飯田太 (信大 2外), 中西文子 (信大 放)

組織診断の確定した乳癌56例に対し^{99m}Tc-MDPによる骨シンチを施行し検討した。病期分類別では、Ⅰ期7例、Ⅱ期37例、Ⅲ期9例およびⅣ期3例である。Ⅰ期では7例中1例に骨転移が認められ、Ⅱ期では37例中骨転移確診5例、疑診6例であった。さらに、Ⅲ期では9例中骨転移確診3例、疑診2例であり、Ⅳ期の3例では全例骨転移が認められた。乳癌の病期からみて進行例に骨転移の発生頻度が高いのは当然ながら、比較的早期の乳癌においても骨転移がみられたことから、早期の乳癌に対しても骨転移の有無を検索する方法として骨シンチが有用であることが判明した。また、骨転移症例において、骨シンチが化学療法およびホルモン療法の治療効果の判定に有用であるという成績を得た。骨転移の発生期間については、術後1年から数年に至るものがあり、長期の観察が必要である。最近、われわれは乳癌患者に対し術前および術後6ヶ月毎に定期的に骨シンチを施行し、骨転移の早期発見につとめている。骨転移の中には外科的治療の対象となるものもあるので、その早期発見は治療方針の決定にきわめて重要である。

452 乳癌骨転移治療効果判定における骨シンチの役割

松本誠一, 峯 博子, 杉山丈夫, 金田浩一 (癌研 放)

磯辺 靖, 和田成仁, 川口智義 (癌研 整)

現在、乳癌骨転移に対しては、放射線による局所療法他に、ホルモン療法、化学療法などの全身療法が施行されている。しかし、これら骨転移に対する様々な全身療法の治療効果判定に関しては未だ不明な点が多い。今回、我々は骨シンチが治療効果判定に果たす役割について検討したので報告する。

対象は1978年1月から1983年2月までの5年2ヶ月間に癌研病院にて乳癌に施行された骨スキャン2662件(1426症例)である。この中で全身療法にてスキャン上明らかに改善をみたのは30症例であった。これら30症例につき、治療開始からスキャン上改善をみるまでの期間、改善の持続期間、他の転移巣の治療効果との関係などにつき報告する。

453 骨シンチグラフィの臨床的有効度に関するプロスペクティブスタディー

中島哲夫 (埼玉がん 放) 松本徹, 飯沼武, 館野之男, 石川達雄 (放医研) 秋山芳久, 油井信春 (千葉がん) 町田喜久雄, 西川潤一, 飯尾正宏 (東大) 宇野公一 (千葉大) 内山暁 (山梨医大) 川上憲司, 三木誠 (慈恵医大) 久保敦司, 高木八重子 (慶大) 村田啓 (都立養育院) 日下部きよ子 (東女医大) 小山田日吉丸 (国立がん)

日本アイソトープ協会エフィカシー専門委員会では、骨シンチグラフィによる骨転移の診断における臨床的有効度の定量的評価を目的として、10施設によるプロスペクティブスタディーを行っており、その方法及び中間的解析結果などについて報告する。

対象は乳癌と前立腺癌の手術前症例とし、検査前の骨転移の確率を主治医が記入する検査前データシート、検査後の骨転移の確率を検査医が記入する検査後データシート、最終診断を記入する確定用データシートの3つのシートが記録され、コンピュータに入力される。現在までの収集症例数は、乳癌355例、前立腺癌98例である。また最終的な定量的評価を行うまでには至らないが、骨シンチグラフィの臨床的有効度に関する貴重な解析結果が得られるものと考え。今回は本研究における問題点についても合わせて報告したい。

454 良性肋骨病変の骨シンチグラフィの検討

小林寿治, 藤田礼一郎 (社会保険浜松病院内) 田中健二, 河辺憲郎 (同・整形), 清水正義 (同核), 柏田和子 (聖マ医大 三内), 早瀬武雄 (茅ヶ崎市立病院 核), 高木正人 (東邦大 二内) 佐々木康人 (同 放)

Tc-99m-MDPによる骨シンチグラムは悪性腫瘍の骨転移の検出に繁用されている。しかし、良性疾患でも陽性像が得られるため、特に病巣が限局している場合には鑑別診断が問題となる。われわれは骨シンチグラム上陽性像を呈した良性肋骨病変症例を集め検討を加えたので報告する。

検討の対象としたのは軽度の肋骨外傷、肋骨カリエス、慢性腎不全、腎移植後の高カルシウム血症、良性軟骨腫、乳癌術後などの14症例である。いずれも骨シンチグラム上肋骨に限局する放射能集積増加を示した。肋骨外傷例ではX線撮影上異常所見を認めなかった。軟骨腫の1例は放射能集積異常部の生検を行った。経過を観察しえた症例では放射能集積異常は軽減または消失した。